エアライン2013年12月号別冊　1980年12月6日第3種郵便物認可　2013年12月1日発行　第33巻第16号

航空旅行

vol.07
2013
AUTUMN

ジェットストリームが旅へといざなう

太平洋 浪漫航路をゆく

太平洋が狭くなった!? 何もかもが新しいANAで西海岸を満喫
ユナイテッド航空の新路線でデンバーへ！コロラドの大自然に触れる旅
デルタ航空太平洋線のCクラスが全便フルフラット化！「大人のNY」を愉しむ
成田から大韓航空で飛ぶ常夏のハワイリゾート
路線・機材・サービス――「太平洋航路の研究」
日本人利用者の多いアメリカ巨大空港ガイド

列島横断！機窓の眺めが楽しいゾ!!

“マイル・ハイ・シティ”海抜1600mの街

DENVER

❶デンバー国際空港に到着後は、空港近くの「ハーツレンタカー」の営業所へ行き、日本で予約しておいたクルマをピックアップ。アメリカの地方都市の移動には、クルマが不可欠だ。
❷デンバーの街の観光には「Bサイクル」というレンタサイクルの利用がおすすめだ。市内各所にステーションが設けられており、借りた場所でなくても返却が可能。
❸ウエスタンウェアブランド「ロックマウント・ランチウェア」もデンバーが発祥。店内には何種類もの伝統的なカウボーイハットやブーツが並ぶ。
❹ダウンタウンの中心は、お洒落なショップやレストランが建ち並ぶ16番通り。フリーモールライドという無料のシャトルバスも走っている。

❺ハーバーフロントにある「デンバー・ビア・カンパニー」。デンバーにはあちこちに、ロッキー山脈から湧き出る新鮮な水を利用した地ビール醸造所がある。ビール生産量は全米第1位だ。
❻小さなグラスに注がれた8種類のテイスティング用ビール。それぞれに味や風味が違う。この中では「IPA(インディア・ペールエール)」が私の好みだ。

20年も経ってしまうと、もう初めて来たのと変わらない。そこで到着した日の午後は、観光局の人に主だったスポットを案内してもらうことになった。

新鮮な湧き水を利用しビール生産量は全米一

案内してくれたのは、デンバー観光局に勤めるデボラ・パークさんだ。

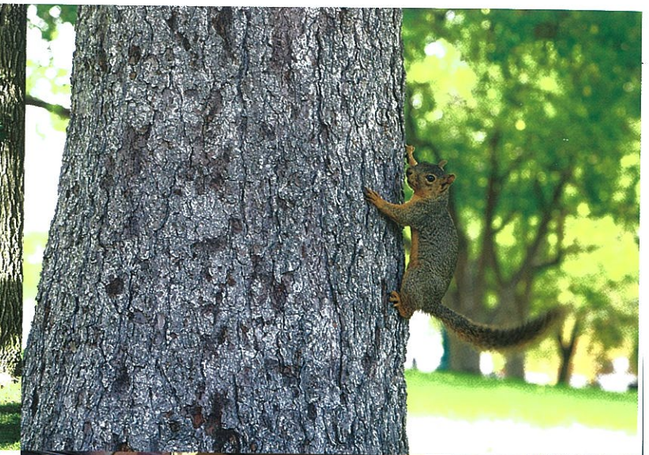
私たちはフリーモールライドという無料のシャトルバスが走る街の中心地の16番通りからスタートし、お洒落なラリマースクエアや赤レンガの古い建物が建ち並ぶロード地区などを2時間ほどかけて散策した。そのあとは、乾いたのどを潤しにハーバーフロントにある地ビール醸造パブ「デンバー・ビア・カンパニー」へ。

デンバーには、ロッキー山脈から湧き出る新鮮な水を利用した地ビール醸造所があちこちにある。ビール生産量は全米で第一位だ。パークさんは小さなグラスに注がれた8種類のテイスティング用ビールをテーブルに並べ、私に「さあ、試してみて」と言った。

それぞれに味や風味の違う8種類を、一つひとつゆっくり味わう。その途中で彼女は席を立ち、冷たい水を満たした大きなグラスを持ってきた。ビールといっしょに、ときどき水も飲むように——と私に言うのだ。

水をいっしょに？　意外だった。ウイスキーなどをストレートで飲むときにはチェイサーもいっしょに頼むが、ビールにチェイサーなんて聞いたことがない。

「あ、そういう意味じゃなくて」と、いぶかしがる私にパークさんは笑って首を振った。「デンバーは標高が高いので、観光客の中にはときどき高山病にか



旅のテーマは“大自然”“アート”“美食”

デンバー&ボルダー、ロッキー山脈に抱かれて

ユナイテッド航空の最新鋭の翼でやってきたコロラド州の州都、デンバー。
同州内にあるロハス発祥の地として知られるボルダーにも足を延ばし、
雄大なロッキー山脈のふもとで、人と自然のやさしさに包まれた心洗われる旅を満喫した。

ジェットストリームが旅へといざなう
太平洋 浪漫航路をゆく
ROMANTIC PACIFIC-CROSSING FLIGHTS

ロッキー山脈を眺めながらの快適ドライブをスタート

成田から10時間30分のフライトを終えてデンバー国際空港に到着した私たちは、まずは空港近くの「ハーツレンタカー」の営業所へ向かった。日本で予約しておいたクルマをピックアップするためだ。

アメリカの、とくに地方都市を旅するときは、移動の足としてクルマは欠かせない。カウンターで予約書を提示すると、さっそくブルーメタリックのコンパクトカーが用意される。同行の写真家・倉谷清文氏と交代で運転し、一人はナビ役に徹することにした。

空港からデンバーの中心部までは約一時間の距離だ。ナビ・システムをオプションで付けてもらっていたので、道に迷うこともない。行く手には雄大なロッキー山脈の稜線が、午後の陽射しを受けてくっきりと浮かび上がっている。

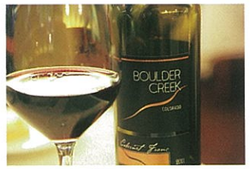
デンバーの街を訪れるのは、かれこれ20年ぶりである。街はこの何年かですっかり様変わりしているそうだし、

ジェットストリームが旅へといざなう

太平洋 浪漫航路をゆく

ROMANTIC PACIFIC-CROSSING FLIGHTS

最終日のディナーは、山の中腹にある有名レストラン「フラッグスタッフ・ハウス」で。1994年6月には天皇皇后両陛下もここで食事をされた。



"Farm to Table（農園からテーブルへ）"というコンセプトのもと、料理はいずれも地元の新鮮な農産物やチーズ、有機栽培の肥料で育った肉類などを使って作られる。ワインももちろんボルダー産だ。

「オープンスペース」と呼ばれる自然保護区に囲まれたボルダーには、ランニングやサイクリング、ハイキングなどのコースがいたるところに整備されている。

「ボルダー市民の約半数がマラソンランナーよ」

観光局を訪ねたとき、広報マネージャーのキム・フェイリンさんはがそう言って笑っていた。市民の半分というのはジョークだと思うが、たしかにいつどこへ行っても、走っている人を見かけないときがない。

ボルダー滞在2日目の早朝、倉谷氏が「ロッキーの岩肌が朝日で染まる風景を写真に収めたい」と二人でクルマで出かけていった。その撮影を終えて戻った彼から、こんな報告も届いている。

「日が昇る前に三脚を立てて準備していたら、まだ真っ暗な中を何人かのランナーが私を追い越して山のほうに消えていきました。秋本さん、市民の半分がマラソンランナーというのは、あながち嘘じゃないですよ」

ボルダーはロハス発祥の地としても知られる街だ。健康志向の人が多く、街なかには "Farm to Table（農園からテーブルへ）" というコンセプトで営業を続けるレストランなども数多く存在する。

「シェフたちは近隣の農家と直接かかわりを持ち、レストラン自体が農場を経営しているというケースも少なくありません。新鮮な農産物やチーズ、有機栽培の肥料で育った肉類などを使った料理は、ヘルシーで本当においしいですよ」

そんな情報も観光局で入手した私たちは、その日のディナーに「一番のおすすめ」というレストランを予約した。

その後もあちこちに寄り道しながら、ボルダーの街に入ったときにはお昼を過ぎていた。ロッキー山脈に向かってまっすぐに伸びる道路にさしかかり、ふと倉谷氏が呟く。

「あれ、この風景？」

最近どこかで見たぞ、とでも言いたげである。

私もじつは、同じことを感じていた。いくつかの場面を頭の中に蘇らせ、そしてようやく思い出す。今年（2013年）8月にモスクワで開催された世界陸上の女子マラソンのときだ！　そのテレビ中継の際に、日本代表の野口みずき選手が高地トレーニングの合宿地としてここボルダーを選んだことが映像とともに紹介されていた。

ボルダーには、持久力を要するトップアスリートたちが世界中から集まってくる。標高が高いだけでは、高地トレーニングに向いているとは言えない。ボルダーには、アスリートたちへのトレーニング指導のノウハウが蓄積され、多くのプロのトレーナーが育成されてきた。モスクワ世界陸上での野口選手は残念ながら完走を果たせなかったが、2000年のシドニー五輪の金メダリスト、高橋尚子さんもこの地でトレーニングを重ねたことは有名だ。

自然保護区に囲まれ健康志向を貫く人々

外国人だけではなく、この街とその近郊からは過去に70人近い五輪選手が輩出されてきた。ボルダーは、まるで街全体がトレーニングコースだ。「オープンスペース」と呼ばれる自然保護区が街をぐるっと取り囲み、ランニングやサイクリング、ハイキングなどのコースがあちこちに整備されている。